第20回

「荻窪の記憶」こぼればなし

絹の道

数日前のこと、自転車で高円寺の蚕糸の森公園に向かっていると、携帯のベルが鳴りました。本コラムの締め切り日を知らせる電話でした。毎回、コラムのテーマ探しには苦労しますが、今回もテーマが決まらないうちに締め切りが目の前というわけです。

旧蚕糸試験場の門

ところで、筆者が蚕糸の森公園に向かっていたのは、「荻窪の記憶」展のパネルに載せる旧蚕糸試験場の赤レンガの門の写真を撮るためでした。一万坪の敷地を誇った蚕糸試験場は、戦前、日本の輸出品の第一位を占めていた生糸の重要さを物語っています。もう、あれこれテーマを迷っていても仕方ありません。ここは、生糸にテーマをしぼるのが賢明というものでしょう。

さて、生糸をつくるには、桑を育てて蚕を飼い、繭をつくらせる「養蚕」と繭から糸をつくる「製糸」の二つのプロセスが必要です。そのため、明治政府は世界最大級の富岡製糸場をつくり、農家の副業として養蚕を大いに奨励しました。武蔵野の農村だった杉並区も例外ではありません。しかし、必ずしもその成績は振るいませんでした。そうしたなかで、上下の井草と上下の荻窪からなる井荻村は例外で、豊多摩郡第一の養蚕村になりました。下井草で蚕の飼育を研究していた大沢初蔵というよき指導者がいたからです。初蔵は、繭の収穫量は蚕種紙（さんしゅし）の良否によると、全国から蚕種紙を取り寄せ、杉並の風土に適するものを見つけ、技術指導に当りました。

蚕種紙は「たねがみ」ともいい、蚕蛾（かいこが）に卵を産み付けさせた紙です。下の写真は、中国で紀行番組を制作した折、シルクロードのオアシス都市ホータンで撮った蚕種紙と蚕蛾です。中国で生まれた養蚕技術は秦の時代から厳しく統制され、長く国外に出ることはありませんでした。その技術がはじめて西域に伝えられたのがホータンだったといわれ、玄奘三蔵の『大唐西域記』にも、「ホータンの国王に嫁した漢の王女が、国外持ち出しを禁じられていた桑と蚕の種を冠のなかに隠してもたらした」と書かかれています。

日本に養蚕技術が伝わったのも、この頃のようです。しかし、シルクロードで中国と結ばれたヨーロッパへ伝わるのは、それから500年以上も先のことでした。卵から孵った蚕は、柔らかな桑の葉がなければ、育ちません。その桑の栽培が難しかったのが一因だそうです。

蚕種紙

いまも初蔵が残した養蚕に関する明治時代の文書を保管する大沢家の前には、早稲田通りが走っています。夕闇迫るその道が、筆者には、絹の道「シルクロード」にも思えたことでした。

「荻窪の記憶」プロジェクト　松井和男